

芭蕉の「うき世」観

——『貝おほひ』より『笈の小文』の旅に至る——

米谷 巖

はじめに

「うき世」の語には、浮世または憂世の二様の漢字が当てられるが、ここでは両者を一括してとり扱い、「うき世」と表記しておく。「うき世」とは、人生・現世・俗世間をさす。その「うき世」を、楽しくすばらしいもの。逆に、苦しくつらいもの。または、はかなく定めぬもの。そして、煩わしく汚れたもの——などとするさまさまの見方があるが、芭蕉はどのようなものと見ていたであろう。さしあたっては、芭蕉の「うき世」観がどのように推移したか、その生活および芸術態度と合わせて探ってみたい。ひいては、芭蕉の詩境の展開をうかがう手がかりにもなろうと思う。

(一)

先ず「うき世」の語は、芭蕉廿九歳の寛文十二年正月に成った処

女撰集『貝おほひ』（三十番俳諧合）の判詞に初見する。

五番

左持

牛馬の糞踏み分けて雪間かな

貞好

右

消え残る雪間や諸足踏んごんだ

一友

左の句、雪間を踏み分けし冷たきは、「うきくどっこい」
き世に住めば、うきこそ勝れ」と唄ふは然あるべし。（下略）
句合は、歌合にならつて貞門で愛好された文芸遊戯の一つであるが、小唄や六方詞を駆使した芭蕉の判詞は、いかにも軽妙にして潤達で、ようやく抬頭の気運にあつた談林の気分を先取りした観がある。郷里の親友横月は、当時の芭蕉を「其性嗜滑稽、潜心於詠諧者、幾換伏臘矣」（跋文）と紹介している。伊賀の山中に在りながら、時代の動向を敏感に看取した若き日の芭蕉の才気あふれる風貌が偲ばれる。

「うき世に住めば、うきこそ勝れ」と言うからには、この世を憂世・苦界として捉えているわけであるが、憂世と観ずる理由が「雪間を踏み分けし冷たさ」にあるというのだから、たあいが無い。要するに、はやり唄や流行語を借りて、発句の冗談に洒落れた相槌を打ったまでにすぎない。

八番

左勝

歌へるや晚鐘寺ぶし春の花

鋤道

右

種ならばまかせてをける花鳥 指蓋子

(前略) 右の句、花の種をまかせが定なら、説いて、口説いて、語りて聞かせ侍らん。種を蒔かるる花好きの心も優に聞こゆれど、うき世五十年、一寸もまだ伸びぬ。花の枝咲くまでの間遠なれば、まづ目の前の晚鐘寺の今日の花見こそ尊けれ。仍て左を為勝。

右の句は、人生わずか五十年にすぎないのに、今から種を蒔くのでは、とても待ち遠しくてやりきれぬ、というのである。「うき世五十年」は、短くはかない人生の意と見られるが、これも「人間五十年、下天の内を比べれば、夢幻の如くなり。一度生を受け、滅せぬ者のあるべきか」(舞の本 敦盛)といった歌詞を念頭においての筆と思われる(校本芭蕉全集七俳論篇)。

発句合「貝おほひ」の判詞に見える二例の「うき世」は、憂き世と言ひ、無常の人生と唱えるものの、巷間に膾炙した歌の文句を利用して筆を弄したまでの常識論で、芭蕉自身の体験の裏付けを持つ実感句とは思えない。

梅の風俳諧国に盛んなり

信章(素堂)

こちとうづれも此の時の春

桃青(芭蕉)

(延宝四年刊「江戸両吟集」)

梅翁こそ宗因流俳諧流行の波に乗って、江戸俳壇の一角に地歩を獲得する延宝期には、意外に「うき世」の用例が見えない。しかし

阿蘭陀も花に来にけり馬に鞍(延宝七年)

於春々大哉春と云々

(延宝八年)

等、謡曲や漢詩文の奔放なパロディーに才を競い、朗笑を求める時流を懸命に追っていた当時の芭蕉に、個性的な「うき世」観があったとは考えられない。すでに「貝おほひ」に横溢していた現世謳歌的・享樂的な時代思潮に樂天的に身を浸していたものと思われる。

(一)

ここのとせの春秋、市中に住み侘びて、居を深川のほとりに移す。「長安は古來名利の地、空手にして金なき者は行路難し」と言ひけむ人の賢く覚え侍るは、この身の乏しき故にや。柴の戸に茶を木の葉掻く風かな(延宝八年)

折から談林俳諧が輻輳を迎える延宝八年の冬、三十七歳の芭蕉は、江戸市中から諸事不便な郊外の深川に転居する。その具体的な理由は判然としないが、言われるように、市中脱出を当初から積極的に芭蕉が選んだものとは思われない。泊船堂(のちに言う芭蕉庵)に入居して数年間、芭蕉は「貧窮問答歌」を高ぶった調子で歌いつづける。

富家喰肌肉、丈夫喫菜根、子ハ乏し。

雪の朝獨り干^シ鮭^ヲを噛ミ得タリ (延宝八年)

元朝心感有

餅を夢に折り結ふ齒^シ菜^ノの草枕 (天和元年)

茅舎買水

氷^ニ苦^クく儼^ニ鼠^ノが咽^ヲをうるほせり (同年)

暮れ^ハて餅^ヲを木^ノ魂^ノの佗^レび寝哉 (同年)

憂^テ方^ニ知^ル酒^ヲ聖^ニ 始^メ覺^ス錢^ノ神^ヲ

花にうき世我酒白く食黒し (天和二年)

「花にうき世」を「浮世」と「憂世」を掛けたと解する説もあるが、賛成できない。やはり花に浮かれ樂しむ世の意の「花に浮世」と、「我酒白く食黒し」を對比させたと見るべきである。「うき世」を

今さらのように驕奢、逸樂の巷と見るのは、貧窮に追いつめられた芭蕉の痛切な失意に基づいていよう。

苦節十年、人並みに壮年期の夢を追った「名利の地」から、結局はじき出されてみて、芭蕉は初めて「うき世」を見直し、同時に自己をいやでも凝視せざるをえなくなつたのである。ここに、わが心の哀歌が始まる。

月をわび、身をわび、拙きをわびて、わぶと答へむとすれど、問ふ人もなし。なほわびく、て、

佗^テすめ月^ノ佗^テ涼^クが奈良茶歌 (天和元年)

老杜「茅舎破風」の歌あり。坡翁、ふたたび此句を佗びて「屋漏」の句作る。其世の雨を芭蕉葉に聴きて、独寝の草の戸、

芭蕉野分して盞に雨を聴く夜哉 (天和元年)

窓含西嶺千秋雪

門泊東海万里船

我其句を識つて、其心ヲ見ず。その佗^レをはかりて、其樂^ヲを知らず。唯、老杜にまされるものは、獨^ニ多^ク病^シのみ。閑素茅舎の芭蕉にかくれて、みづから乞食の翁と呼ぶ。

槽^ノ波^ヲを打つてはらわた氷る夜や涙 (同年)

憶^テ老^シ杜^ヲ

髭風ヲ吹いて暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ (天和二年)

手づから雨のわび笠を貼りて

世にふるもさらに宗祇の宿り哉 (同年)

窮乏と孤独の庵住を和漢の詩人のそれに擬することによつて、慘めな心を必死で支えようとしていたさまがうかがえる。「我其句を識つて、其心を見ず」と歎いていることでも察せられるように、もはや知識としてではなく、自己救済のために、芭蕉は切実に古人の心を求めた。このころ芭蕉は、風雅の先達ばかりでなく、莊子の哲学にふけり、あるいは禪を模索する。

こうした生活苦と精神的苦悶のさなかに、追い討ちをかけるように天和二年暮れの大火に遭つて草庵すら失い、つてを頼つて暫く甲斐に流寓の身となる。其角は後年「是ぞ玉の緒のはかなき初め也。爰に猶如火宅の変を悟り、無所住の心を発し」(芭蕉翁終焉記)たと解している。芭蕉ものちに門人の火事見舞で、「我も甲斐山中にひき移り、さまざま苦勞いたし候へば、御難儀のほど察し申す」(元禄三年四月廿四日付北枝宛書簡)と述べている。さらに天和三年の六月には、郷里の母を失うが、ただちに墓参に帰ることさえで

きぬ窮迫ぶりであつた。

(三)

しかし、芭蕉はそうした苦悶・辛酸をくぐることによつて、
桑の実や花なき蝶の世捨酒 (天和二年カ)

といつた実人生の落伍者意識を、やがて克服する。世に捨てられたのではなく、みずから世を捨てた隠者としての心境が開けてくるわけである。

一年近い流浪生活ののち、天和三年の冬、素堂ら門人の厚意で再建された芭蕉庵に入る。いわゆる第二次芭蕉庵が再び深川の地に営まれたのは、旧庵時代のよしみで借家が得られやすかつたせいもあるが、今回は余儀なき市中撤退ではなく、求めて深川の地を選んだのにちがいない。

翌貞享元年、四十一歳の歳旦には
(初案) 我富めり新年古き米五升
(成案) 春立つや新年古き米五升

と詠んでいる。なお初句を「似合はしや」とした句案も伝わる。第一次芭蕉庵時代の芭蕉であれば、古米五升の備蓄を得て「我富めり」とは、冗談にも言わなかつたであろう。のちに言う「貧しきを富めりとし」(元禄六年「閑閑之説」)、「貧しきを悦」(貞享元年「竹の奥」)ふ心境の転換が始まつたのである。失うだけ失つて、今やみずから足るすべを悟つたのであろう。

それというのも、一つには、あれほど彼を敗北感にさいなみ、それほど執心させた「うき世」が、もはや「浮世」として芭蕉の眼に映らなくなつていたからであろう。同じ年の八月、帰郷の旅の途上

東海道で哀れげに泣く捨て子に出会つた芭蕉は、「うき世を凌ぐに耐えず、露ばかりの命を待つ間と捨て置きけむ云々」と述べている。捨て子の親子に限らず、むしろこれが「うき世」の実相だと感得していたものと思われる。

猿を聞く人捨子に秋の風いかに
と訴えてみても、所詮その子を救う才覚も力もなかつた芭蕉は、「今宵や散るらん、明日や萎れんと」死を予期しつつ、わずかに喰物をなげ与えて通り過ぎるしかなかつた。
そのいわばうしろめたさを、

いかにぞや汝、父に悪まれたるか、母にうとまれたるか。父は汝を悪むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯これ天にして、汝が性のつたなきを泣け。

と、自問自答して天運のせいに帰しているが、その心の底には人生無常の思いが激しくうずいていたと思われる。

いつたい野ざらし紀行の旅の前半は、母の死後はじめての墓参を重要な用件の一つとしていたせいもあつて、門出吟の
野ざらしを心に風のしむ身かな

を初めとして、死の観念に執する傾向が濃い。

死への畏怖と人間の無力感に主導されることの多い無常感は、「うき世」に執心することのむなしさを自覚させ、「花に浮世」と「我酒白く食黒し」などと自他を立て分け、独り疎外感に立てこもることの愚しさを教えたにちがいない。

(四)

野ざらしの旅で帰郷した折の揮毫と伝える芭蕉の戯歌に、次のよ

うな「骸骨」の画賛がある。

誰も見よこれをまことの形ぞと

知らばうき世はじきに極楽

すでに生死の境を超脱した観のあるこうした人生観は主として禪の論理に学んだものに違いない。

しかし「野ざらし紀行」の中で、自分の旅姿を、

腰間に寸鉄を不帯、襟に一囊を懸けて、手に十八の珠を携ふ。

僧に似て塵あり、俗に似て髪なし。我僧に非ずといへども、云

云

と叙しているように、彼は僧に似て僧ではなかった(「鹿島詣」に

も)。芭蕉は何よりもやはり詩人であった。「幻住庵記」(元禄三年)

の中で、

いかにぞや、法をも修せず、俗をも動めず、仁にもつかず、

義にもよらず。唯若き時より横ざまに好ける事ありて、暫く生

涯のはかりごととさへなれば、万のこころを入れず、終に無能

無才にして此一筋につながる(「芭蕉文考」所収草稿)

つらつら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官

懸命の地をうらやみ、一たびは仏離祖室の扉に入らむとせしは

たどりなき風雲に身を責め、花鳥に情を勞して、暫く生涯のは

かりごととさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。

(「猿蓑」所収定稿)

と述懐し、また「笈の小文」所収の俳文では、

かれ、狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごととなす。

(中略)しばらく身を立てむことを願へども、これが為に障へ

られ、暫く学んで愚を曉らんことを思へども、是がために破ら

れ、つひに無能無芸にして、只此一筋に繋がる。

と回想している。いついかなる時も、彼の心をとらえて離さず、芭

蕉を真に救つたものは、宗教でもまた哲学でもなく、やはり文学で

あった。

その風雅がどのような性質のものであるかは、すでに「みなし栗」

の時点で見据えられている。

栗と呼ぶ一書、其味四つあり。李杜が心酒を嘗めて、寒山が

法粥を啜る。これによって其句、見るに遥かにして聞くに遠し。

佗と風雅のその生にあらぬは、西行の山家を尋ねて、人の拾は

ぬ、蝕栗なり。

(天和三年五月芭蕉跋)

編者其角も「世に拾はれぬみなし栗」(自序)と自認しているが、

そのめざす「佗と風雅」は「生にあらぬ」もので、「人の拾はぬ蝕

栗」であると言う。

これまでの俳諧は、もろもろの趣味や娯楽と等しく、人をたがいに

に楽しませる社交的有用の芸であった。しかし、のちの「子が風雅

は夏炉冬扇のごとし。衆に逆ひて用ゐる所なし」(元禄六年、許六

離別ノ詞)という自負に向かう自覚が、すでにここにある。

かけがえない自己救出の道であった芭蕉の風雅は、「わび」を

理想とした。あれほど不如意をかこつた「佗」の生活こそ、実は彼

の嗜好に最もかなう世界であった。しかも、「わび」ほど「佗」の生

活と不可分な美も珍しい。生活を厳しく律して、身を孤独と清貧の

中に置かなくては、真の「わび」をものにすることはできないであ

ろう。

野ざらしの旅の途、大和の竹内村を訪ねた折、所の庄屋油屋喜右

衛門の高潔を賞した文章で、「まことその人は尋常にあらず。心は

高きに遊んで、身は鸚鵡雉兔の交り^{まじり}をなし、みづから鋤を荷^おひて淵明が園に分け入り、牛を引きては箕山の隱士を伴ふ。(貞享元年九月、「竹の奥」と述べている。心を高きに遊ばせるために、芭蕉はその生活態度を例えば許由や巢父のようにいさぎよく持すことを願った。

「わび」を求めて「佗」の生活に徹することは、当代人の眼にはいかにも「尋常にあらず」、酔狂に映つたに違いない。俳人でもあつた上田秋成でさえ、中世と近世とは歴史的・社会的状況の異なることを挙げて、芭蕉の隱者的生涯を評し、「いとも心得ぬ。(中略)まことに堯年鼓腹のあまりとはいへども、ゆめ／＼字ぶまじき人の有様なりとぞ思ふ」(去年の枝折)と、時代錯誤に類する狂態だとしている。建部綾足も、安直に真似る風潮があるのを、「芭蕉の毒」(片歌二夜問答)と難じている。

(四)

野ざらし紀行の旅に出る時、門人李下は、

芭蕉野分其句に草鞋替へよかし

とはなむけし、芭蕉は脇を付して

月と紅葉を酒の乞食^{こじき}

と応えている。

初め、野ざらしの旅は草庵時代の延長でしかなかった。哀れな借家住まいを古人の詩句のイメージで飾つたように、今またその乞食旅行を、「古・かやうの夜の風」(野晒紀行・酬和の句)と、昔の旅の詩人に重ね合わせることで耐えようとした。

しかし、門出の心境を、「三更月下無何に入る、と言ひけむ、昔

の人の杖にすがりて、旅に出ようとすがり、風の声そぞろ寒げなり」とも「風のしむ身かな」とも告白しているように、まるで自信がなかった。当初の目的地の一つであつた大垣にたどり着いた時、「死にもせず旅寝の果よ秋の暮」と安堵の吐息を漏らしていることからしても、それまでの旅がいかに不安な、自信に欠けるものであつたかがわかる。

しかしその後、旅寝そのものを主目的とする無用の旅が初まるにつれて、「佗」が観念性を脱して、風狂性を顕著にしてくる。

笠は長途の雨にほころび、帯衣はとまり／＼の嵐に揉めたり。佗びつくしたるわび人、我さへあはれに覚える。昔、狂歌の才士、此国にたどりし事をふと思ひ出て、申し侍る。
狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉 (冬の日)

ここにはなお、「我さへあはれにおぼえける」という、天和期以来の青いてらいや自意識が尾を曳いている。しかし、自分の佗び姿を、たとえば杜甫や西行になぞらえず、「竹齋」に擬して戯画化して見せたところに、余裕と自信が読み取れる。

以前は、「その佗をはかりて、其楽を知らず」(天和元年、「乞食の翁」と歎いたように、ポーズだけは「佗」を気取ってみても、肝心の心境が容易に至らなかつた。この旅が終わりに近づいた頃、いづれ尾張あたりであろう、次のような付合を残している。

佗おもしろく椀の粥煮る

更科の里の礎を打ちに行き 芭蕉

後年、「佗びしきを面白がるは、やさしき道(注・風雅の道)に入りたるかひなりけらし」(別座舖)所収。浪化の「随門記」にも、ほぼ同文)と語つたというが、風雅の旅という「佗」を、楽しみ興ずる境地が

ようやく開けてきたのである。

その後は、

雪見にありきて、

市人よ此笠売らう雪の傘

爰に草鞋をとき、かしこに杖を捨てて、旅寝ながらに年の

暮れければ、

年暮れぬ笠きて草鞋はきながら

卯月の末、庵に旅の疲れをはらすほどに、

夏衣いまだ虱を取りつくさず

のごとく、俗事に恬淡として、どこかふつと微笑をさそう風狂者の
姿態が板についてくる。

(六)

芭蕉は野ざらしの旅の途、花どきでもない吉野に登って、西行庵
住の跡を訪ねている。

西上人の草の庵の跡は奥の院より右の方二町ばかり分け入
るほど、柴人の通ふ道のみわづかに有りて、険しき谷をへ
だてたる、いと尊し。かのとくくくの清水(注、西行の歌と
伝える「とくく」と落つる岩間の苦清水汲みほすほどもなき住まひかな

による)は昔に爰はらずと見えて、今もとくくくと雪落ち
ける。

露とくく試みに浮世すがばや

もしこれ扶桑に伯夷あらば、必ず口をすすがん。もし許由
に告げば、耳を洗はむ。

仰慕してやまない西行幽居のたたずまいをまのあたりに見た時、芭

蕉は自分がお塵俗そのものであると内省されたのである。このこ
ろの芭蕉は、「うき世」を煩わしく、汚れた俗界として意識し、身
辺および心中の塵を払い、清く保つことを強く希求していた。
旅をおえた年の暮にも、次のような句を詠んでいる。

月白き師走は子路が寢覚かな

一段とあわただしく、せわしない師走の世上をよそに、廉潔の士子
路を思いやつて、独り草庵に心を澄ませているのである。

貞享期、なかんずく野ざらしの旅から帰庵後の芭蕉は、ひたすら
心身を塵外に置くことによつて、風雅に遊ぼうとする傾きが著しい。

後年「米銭の中に魂を苦しめて、物の情をわきまへざる」ことを
「罪」としている(元禄六年「閉関之説」)が、少なくとも「米銭
の中に魂を苦しめ」た気配はもはやない。

貫うてくらひ、乞うて喰ひ、やをら飢ゑも死なず年の暮れ
ければ

めでたき人の数にも入らむ老の暮(貞享二年)

さして暮らしが向上したとも思えないが、貧寒寄食の生活を意に介
せず、自得の境を語っている(「先手後手」には、この句に「自得
箴」と題する)。

また、翌貞享三年秋には、自庵の五升入りの大ふくべに、「四山」
という素堂の命名を得て、「(前略)素翁、李白に代りてわが貧を清
くせむとす。かつ空しき(注・ふくべ)時は、塵の器となれ。(注・米
を)得る時は一壺(注・一瓢)も千金を抱きて、煖山(注・秦山)も軽
しとせむこと然り」と述べて、

もの一つ瓢は軽きわが世かな

と詠んでいる。自嘲に似て、決して暗くはない。

(「四山瓢」)

さらに貞享四年（四十四歳）の歳旦には、

嵐雪が送りたる正月小袖を着たれば、

誰やらが形に似たり今朝の春

とある。いただき物の暗着で世間並みに身を飾ったものの、なんだか自分のような気がしないよ、とおどけて謝意を示すところ、ほとんど天真爛漫の境に近い。

(じ)

このように生活に対する心境が安定し、隠閑の境地が深まるにつれて、風雅の世界にも自在に参入しうようになる。その間の消息は、貞享三年ころの次のような句文によくうかがえよう。

わが草の戸の初雪見むと、余所に有りても、空だに曇れば
急ぎ帰ることあまたたびなりけるに、師走の中の八日、初
めて雪降りける喜び、

初雪やさいはひ庵にまかり在る

草庵に降る初雪を見たいがために、他出しても幾度か駆けもどつていた。そのかいあってか、折よく在庵しているときに降ってきたというのである。童心にもたぐうべき純粹境界である。

あら物ぐさの翁や、日ごろは人の訪ひ来るもうるさく、人にもまみえじ、人も招かじと、あまたたび心に髣ふなれど、月の夜、雪の朝のみ、友の慕はるるもわりなしや。ものをも言はず、ひとり酒飲みて、心に問ひ心に語る。庵の戸押し開けて、雪を眺め、又は盃をとりて、筆を染め、筆を捨て。あら物狂ほしの翁や。

酒飲めばいと寝られね夜の雪

支考の「本朝文鑑」には、この句文を「閑居ノ箴」と題するが、閑居の生活がその風雅と一つに融け合っている有様を、まざまざと語ってくれる。

曾良何某、この辺り近く仮りに居を占めて、朝な夕なに訪ひつ訪はる。われ食ひ物いとなむ時は柴を折りくぶる助けとなり、茶を煮る夜は来りて軒を叩く。性、閑隠を好む人にて、交り金を断つ。或る夜、雪に訪はれて、
君火を焚けよきもの見せん雪まるげ

いかにも風狂三昧の隠逸ぶりである。

この年の暮れには、

月雪とのさばりけらし年の暮

と詠んで自省している。そういえば「名月や池をめぐりて夜もすがら」の佳吟も、この年秋、芭蕉庵の月見で得た句であった。しかし、この自己反省は、決して根本的な懷疑や自己否定に及ぶほどのものではない。むしろ一年を風流韻事に送りえたことに安んじている氣息が強い。

このころの芭蕉は、生活を風雅と一如に化しえたとばかりでなく、高雅隠逸の俳士としてようやく俳壇に広く知られるようになる。遙かに句作を送って批点を乞う者や、尾花沢の清風や京の去来のように、はるばる慕って草庵を訪ねて来る者さえあり、その点決して孤独とは言えなかった。生涯を通じて、精神的に最も安定した、その意味では幸福な数年であった、と見られる。

(ハ)

貞享二年の中秋名月の晩には、訪ねて来た三人の雅友と草庵で酒

を汲みかわした（前書略「盃に三つの名を飲む今宵かな」）だけであつたが、翌秋は其角らに誘ひ出され、隅田川に舟を浮かべて月を賞し、句作を競つている（雑談集）。

そして貞享四年には、参禅の師仏頂和尚慰問を兼ねて常陸の鹿島まで、月見の遠出を試みた。「鹿島詣」がその紀行である。（さらに翌元禄元年には、信州更科まで出かける。「更科紀行」の旅。）月見の一事をとつて見ても、風流三昧が年を追つて昂じてくるさまがうかがえる。

芭蕉は何用か貞享三年の秋にも常陸へささやかな舟旅をしている（前書略「明けゆくや二十七夜も三日の月」）が、同四年の鹿島旅行と同様に、「吟行」といった性格の遠出と見てよからう。そして、その種の小旅行の延長として「笈の小文」の旅もあつた、と見られる。

芭蕉は、じつさいに笈の小文の旅に出発する貞享四年十月下旬の一年七か月前に、すでに「当秋冬晩夏之内上京、嵯峨野の御草庵にて親和尽くし可申と頼もしく存罷有候」（貞享三年閏三月十日付去来宛書簡）と、上方旅行の意向をもらしている。しかし、その九か月後に「当夏秋の比、上り可申覚悟に御座候へども、何かと心中障ることも出来、延引、浮生余り自由さに心変わり、猶々難定候」（貞享三年十二月一日付、寂照宛書簡）と、ことわつていることからもうかがえるように、必ずしも積極的ではない。芭蕉の旅が最初の子定より延引することがあるのは珍しくないが、少なくとも奥の細道の旅立ち前のような一途さは認められない。尾張・伊勢・京などの門人の熱心な徳憑に応えようとして遊意は動くものの、旅心おさえがたし、といった気配には遠い。

貞享四年の秋には、

草の戸ばそに住みわびて、秋風の悲しげなる夕暮、友達の
かたへ言ひつかはし侍る（「続虚栗」には「聴閑」と前書）
（栞集）
糞虫の音を聞きに来よ草の庵

という句を近辺の雅友に送つて来庵を勧めている。さつそく、嵐雪（続虚栗）や素堂（糞虫説）が訪れて、句文を交換している（芭蕉「糞虫説跋」）。芭蕉はいまや、自分をよく理解してくれる、ほどよい数の俳友・門人と共にあつた。興に乗れば泊まりがけの吟行をすることもあるが、そうしたことも含めて、草庵を本拠とした風流三昧の暮らしに今は満足していた。それは、「浮生あまり自由さに心変わり、猶々難定候」という言葉にもうかがえる。芭蕉は氣づかれの多い宗匠としての招待旅行に、急いで出かけたという気持ちには容易にならなかつたと想像される。

しかし、各地の門人の熱意にほだされ、度々の延期も限度に來たであろう。またそのうちに、花どきに吉野を訪ねたいといつた、自分自身のためのいくつかの目的も浮かび、ふくらんできた。さらに父の三十三回忌の法要も近いということにからむ望郷の思いも加わつて、ようやく江戸を後にすることに踏み切つたのであろう。

野ざらしの旅の時は、途中で大巾に旅程を延長したのであつたが、今回は吉野の花を訪ねるとすれば、当初から半歳は草庵をあげることに予定されていたことになる（実際には、やはり旅程が延びて、帰庵まで九十か月を要した）。しかし、ほぼ同じ日数が予想された奥の細道の旅のばあいには、その草庵を人手に渡してしまつて出かけているのに比べても、旅に臨む意気込みの違ふことは、明らかである。

(九)

しかし、いよいよ本気で心に決めてみれば、帰郷はもとより、さまざまな楽しい期待が胸に湧きあがってきた。しかも勝手知ったコースではあり、熟知の門人が鶴首して待つ旅の前途に不安のあるうはずはない。

旅人と我名呼ばれん初時雨

出発前の壮行会で披露されたこの句は、「三冊子」によれば、「心のいさましきを句のふりにふり出し」たものだという。明朗・純真な心躍りがうかがえる。

芭蕉は、謡曲「梅が枝」の一節をこの句の前書にし、しかも謡本のように諧点まで打って門人に贈った。同様の趣向は、前年春の句「観音のいらか見やりつ花の雲」にも見られ、このころ芭蕉にはやや風流趣味的傾向が認められる。謡曲に対する嗜好は、この旅中の随所に著しく、

大和国草尾村にて

花の陰譚かげだんに似たる旅寝りやどかな

(曠野)

など、もはや自己陶醉といつてよい。「花に遊ぶ蛇な食らひそ友雀」(貞享四年)の前書や「養虫説跋」で、しきりに共感を示している。「物皆自得す」といった莊子的世界観に魅入られすぎた観がある。

風雅隱逸の境が円熟するにつれて、当初それがもっていたはずの人生および芸術上の抵抗感覚が消失し、反俗というより、いくぶんひとりよがりの離俗に墮してしまつたきらいがある。

笈の小文の旅中、俳席多忙のうちに名古屋で師走を迎えた芭蕉は、旅寝して見しやうき世の煤すすほひ

と詠んでいる。ここには、かつての「花にうき世我酒白く食黒し」(天和元年、虚栗)のように、「うき世」と「我」との間に緊張した関係はない。むしろ芭蕉本来の懐しさを漂わせているが、煤すすほひをわざわざ「うき世の煤すすほひ」と意識し、わが旅寝の境涯をかえりみているところに、この時期の芭蕉の心の姿勢がうかがえよう。

もとより芭蕉は、こうした境地に歩みをとどめてはいなかった。

(昭48・2・18)

(主要参考文献)

○井本農一博士「校本芭蕉全集 第九卷」所収「芭蕉評伝」、

「芭蕉」その人生と芸術」(講談社現代新書)。

○今栄蔵氏、「松尾芭蕉」所収「作家研究篇」・「芭蕉の世界」所収「二、芭蕉という人 1生涯」。

(本学助教授)